

高等学校

花沢 典行 先生 (教員歴10年)
取材時は、茨城県立取手第一高等学校1年生の担任。4月より茨城県立水戸第一高等学校へ転任。現在、2年生の教科担任。

高等学校

川本 直子 先生 (教員歴23年)
取材時は、島根県立浜田水産高等学校2年生の担任。4月より同校にて3年生の担任。



中学校

桑原 真理子 先生 (教員歴12年)
取材時は、北海道美幌町立北中学校1年生の担任。4月より北見市立小泉中学校へ転任。現在、2、3年生の教科担任。

どんなことに取り組んでいる? 課題は何? 現場に立つ先生の思いを共有しよう!

中学校・高等学校教員 オンライン座談会 開催

*本誌では座談会の内容をダイジェストで紹介いたします。全内容については、今後『英語情報Web』にて掲載予定です。

2020年3月下旬、北海道、茨城、島根にある学校をオンラインでつなぎ、中学校教員と高等学校教員による座談会を開催した。「お久しぶりです」「元気ですか?」と画面の向こうで、手を振りながら顔を合わせたのは、2017年度英語教員海外研修の参加者でもある3名の先生たちだ。海外研修での経験や学びをそれぞれの現場でどのように生かしているのだろうか。授業で大切にしていることや具体的な実践を報告し合い、情報を交わした。

多様性を生かしてお互いを認め合う

編集部 授業づくりで大切にしていることは何ですか?

桑原先生 授業では、ペアワークやグループワークを織り交ぜて、クラスが仲良くなることを大切にしています。英語の授業が終わるといつも、クラスの雰囲気明るくなるよね、と感じられたらいいですね。中学校では生徒の学力差が激しいという現状がありますが、そのようななかでも「みんなが参加できる」授業づくりを目指しています。

川本先生 生徒一人一人が発信することを大事にしてい

ます。英語は「使う」ことによって初めて自分の足りない部分に気付いたり、必要な語彙や表現を発見したりすることができます。高校の英語の授業では学問としての深まりも求められますが、英語は相手と意志を交わすために使うものだと思います。英検準2級に合格する生徒がいる一方で、英語に対する苦手意識が強い生徒も多く、まずは言語活動を通して「英語って意外と面白い!?!」と体感してもらい、モチベーションを自分の中から湧かせるためのきっかけづくりができればいいなと思っています。

花沢先生 私は授業をするにあたって、次の3つを常に大

事にしています。

- ① Challenge : Mistakes are O.K.
- ② Cooperate : Work hard with your classmates.
- ③ Accept : Everyone is different.

私の教えているクラスの生徒も英語力の差が大きく、英検1級レベルの生徒もいれば、苦手意識を持った生徒もいます。でも、レベルの差があるからこそ多様性が生まれるので、それを逆に利点であると捉えています。お互いに得意なこと、苦手なことを認め合って授業ができればいいですね。

“生徒の立場”で学んだ経験が生きている

編集部 海外研修に参加して印象に残っていることや、研修後に日々の授業で生かしていることはありますか?

川本先生 教員になって20年以上経ちますが、学習者として研修を受けたことで、“認められることがどんなにうれしいことなのか”ということ、改めて学ぶことができました。たとえ間違っていたとしても、先生が私の言葉を拾ってくれたり、発表したときには仲間が受け入れてくれたりすることを、“生徒の立場”で疑似体験できたことは大きかったですね。研修後は、生徒に必ず問いかけをするようになりました。生徒が発話したら、まずは「そうだよね」と受け止めてから、さらに生徒の言葉を引き出すように心掛けています。
花沢先生 海外研修でご指導いただいた講師の姿は、今でも私のロールモデルとして記憶に残っています。実際に研修を受けてハッと気付かされたのは、これまで自分が、

いかに効率的に分かりやすく説明することだけに力を注いだできたか、ということです。授業を進めるうえで、コミュニケーションの目的や場面、状況、つまりコンテキストを設定することの大切さを学びました。その表現はどのような場面で使うのか、どのような状況でその情報は流れるのかなど、必然性や設定を考えながら授業を組み立てるようになりました。

桑原先生 「こんなふうに学べたら、生徒は授業が楽しいと感じるのだろうか」と明確な指導観を持つことができました。今では研修で学んだ、elicitingやconcept checkingの手法を取り入れて授業をしています。私自身が一番の変化は、生徒の発言に対して「それは違うよ」と言わなくなったことですね。否定されることはとてもつらいことだと体感したので、生徒が発言するのが怖くならないように心掛けています。「いいところまできているね!」「惜しい!」と返したり、意図したこととまったく違う答えが返ってきたとしても、まずは受け止めたうえで、時に笑いも含ませながら、目指す方向へ導いていくことを意識するようになりました。

ステップを踏んで前進していく

編集部 2019年度は、どのような取り組みをされましたか?

花沢先生 卒業時に、進学先や職場、社会生活において実践的に使用できる英語の基礎を身に付けることを目指して、指導してきました。担当の先生たちと話し合っ取り組んだのが、「話すこと [やり取り]」にフォーカスした帯活動です(図1参照)。これまでは授業の最初に、ペアを組んでA

図1 「話すこと [やり取り]」にフォーカスした帯活動

【1ターン】		【2ターン】		【3ターン】	
A	B	A	B	A	B
1	2	1	2	1	2
Ask the question.	Answer the question with + a information.	Ask the question.	Answer the question with + a information.	Ask the question.	Answer the question with + a information.
		3	4	3	4
		Ask one more question.	Answer the question with + a information.	Ask one more question.	Answer the question with + a information.
				6	5
				Answer the question with + a information.	Ask one question to the partner.

ペアでじゃんけんに勝ったらA、負けたらBとして活動する。①のトピックについてAが質問し、Bが答え、プラスアルファの情報を話す。続いて役割を交代して、②のトピックについてやり取りをする。2ターンの場合には、Bが答えたら、Aはさらに関連する質問を考えて投げ掛け、Bが答える。3ターンの場合には、2ターンまで終えたらBが質問をして、Aが答える。

- ① What sport do you like?
- ② What season do you like?

さんがBさんの質問に答えるという1ターンのやり取りでしたが、それを2ターン、3ターンと段階を経て、徐々にやり取りを増やしていきました。1回5分程度のWarm upですが、英検の過去問等を使用させていただき、1週間トピックを変えずにペアを代えて行います。文法的に多少間違っても、質問に対して自分の意見が言えるようになることが目標です。授業構成としては、最初に「やり取りにフォーカスした帯活動(話すこと)」をして、メインの活動で「教科書の内容を理解する(聞くこと、読むこと)」、最後に「身近な話題に落とし込んだ内容による帯活動(話すこと)」で締めるという流れです。

桑原先生 定期考査で点数が取れないと、英語に苦手意識を持ってしまう生徒が多いので、英語のスキット(寸劇)を取り入れ、全員が発表する場面をつくって評価の対象にしています。生徒は役割を与えることで意外と積極的に参加してくれます。1回やると、「またやりたい!」と生徒から声が上がります。見る方も発表する方も楽しいようです。



教科書本文のスキットを参考に、生徒自身がスキットを作り、ペアで発表した。

川本先生 昨年度の新しい取り組みとして、3年生は「Small Debate」に挑戦しました(図2参照)。ディベートをすることが目的ではなく、自分の考え方の幅を広げたり、相手の意見を尊重できるようになってほしいという意図があります。例えば、「Dogs are better than cats for pets.」という論題を提示します。生徒は、じゃんけんで立場を決めて英語で意見を展開していきます。英語で言えない場合は、まず日本語で意見を言ったあと、どのように言えばいいかを考えて、最後にもう一度、英語でやってみよう、という流れで進めます。言葉や表現につまずいた場合は、「誰か分かる人いる?」「これ、以前やったことあるよね?」と投げ掛けて、私が答えを教えるのではなく、

必ず生徒から言葉を引き出すようにしています。日本語が思わず出てしまう場面も多々ありますが、生徒たちは「英語の授業」という感覚を忘れて、夢中で意見を伝え合っています。

目的やゴールを明確にする

編集部 生徒の学び意欲を引き出すために、どのような工夫をしていますか?

川本先生 「Small Debate」の取り組みでは、グループで勝敗がつくようにしています。スポーツやゲームのように、その場で勝ち負けが決まることで生徒たちはモチベーションを高めています。限られた時間のなかで、英語を「聞き取ろう」「話そう」と熱心に取り組む生徒たちの集中力を感じられます。

桑原先生 私もペアで競わせたり、カードを使ったりするなど、「遊び」の感覚を取り入れています。次第に生徒たちは自発的に取り組むようになり、意欲を高めています。また、内容や方法を「変えるもの」と「変えないもの」に区別して行うことも工夫の一つと言えるかもしれません。例えば単語テストでは、イベントのように仕立てて「ここまでできたら次のステージに進む」というルールや型を決めてテンポよく取り組みます。毎回、同じスタイルでやるからこそ、指示や説明をしなくてもすぐに始められますし、生徒自身も「今日こそは満点を取るぞ!」と積極的に参加してくれます。授業時間全体のなかでメリハリをつけて飽きさせないことが大事ですね。

花沢先生 「完璧じゃなくていいんだよ」と、繰り返し伝え続けることですね。あとは、アウトプット活動をするときは、「次のステップは何か、ゴールはどこか、というルーブリック(評価基準)を示して動線を引いてあげること」と「内容に対してのフィードバックや声かけをすること」です。「話すこと」においては、文法の「正確さ」よりも、「内容の適切さ」や相手意識を持ってコミュニケーションを成り立たせることを優先しています。「書くこと」についても、内容に関するフィードバックをするように心掛けています。

小・中・高がつながって、生徒の芽を伸ばし続ける

編集部 小中高接続を踏まえ、現状の課題や今後挑戦し

図2 「Small Debate」で使用しているワークシート

Small Debateの流れ

- ①トピックの導入
- ↓
- ②立場の決定
- ↓
- ③自分の意見をまとめる
- ↓
- ④ペアで意見を述べ合う
1分間、お互いの立場で意見を述べ合う。
- ↓
- ⑤全体で意見を出し合う
意見を全体で出し合い、黒板に書き出す。
- ↓
- ⑥勝敗の決定
どちらが説得力のある意見だったかを挙手で決定する。
- ↓
- ⑦振り返り

Small Debate (1) A=Affirmative(賛成)、N=Negative(反対) Class() No.() Name()

No.	Date(日付)	Topic(論題)	Sides(立場)	Memo(メモ)	Self-evaluation(自己評価)
Ex.	8/28	Dogs are better than cats for pets. (ペットにはネコより犬が良い)	A・N	・Dogs become our friends. ・We can go for a walk with dogs together.	A B C
1			A・N		A B C
2			A・N		A B C
3			A・N		A B C
4			A・N		A B C
5			A・N		A B C

①授業冒頭で教師から問い掛け、生徒の応答と理由から論題へつなげます。

③論題についての意見や理由を1分間で考え、書き出します。

②じゃんけんで立場を決め、A(Affirmative)かN(Negative)に○を付けます。

⑦今日の活動を振り返り、3段階で自己評価をします。

ていきたいことを教えてください。

花沢先生 小・中学校の先生が育ててきた芽を伸ばし、背中を押し続けられる高校教員でありたいと思っています。今、漠然と考えているのは、「生徒たちの思考を活性化させる質問は何か」「教科書プラスアルファの知識や思考力を身に付けるために、どのような活動が必要か」ということです。4月からの勤務校でも、まずは生徒との親和関係を築きながら、しばらくはそれらが自分にとっての課題になるかと思っています。久しぶりに、川本先生や桑原先生とお話しして、自分もしっかりやっていこう!という気持ちが高まりました。

桑原先生 花沢先生や川本先生のように、将来的に生徒が英語をどのような場面で使っていくのかを意識するという視点を持っておくことは大切ですね。今日、先生方とお話しして、私も今後はそこを意識していきたいと思いました。私も異動するので、着任後はまず生徒の状況を把握しながらになりますが、今後はAll Englishの授業にも挑戦していきたいですね。小学校の先生方が大切に育ててくださった英語に対する興味・関心や、コミュニケーションへの意欲を受け継ぎ、生徒が「中学校に入って英語が嫌いになった」と感じることなく、英語が好きな気持ちを持ち続けたまま、高校へ送り出すことができるようにしたいです。

川本先生 学習到達目標に基づいた評価規準をしっかりと

と作り、生徒がそこに向かって努力していけるような仕組みを作りたいです。やり取りを中心とした帯活動や英語で質疑応答ができるように日頃から取り組み、身近な先生やALTにインタビューするなど、教室を出て、より実践的な形で英語を使う場をつくっていききたいですね。実業高校なので、生徒たちは、卒業すると社会へ出ていくことになります。英語力も必要ですが、英語学習を通して、社会の問題について考える力や自分の意見を発信する力、幅広い視野も同時に身に付けていってほしいと思っています。
編集部 ありがとうございます。オンライン座談会は初の試みでしたが、今後も全国の先生たちをつないで実践報告や情報共有ができる場をつくっていききたいと考えています。

本誌・『英語情報Web』連動企画

「オンライン座談会」

3名の先生方が日頃の授業で実践している取り組みの詳細や、これから新たに実践していくことなどを、今後は『英語情報Web』でもお伝えしていきます。また、新たに「オンライン座談会」にご参加いただける先生方も募集します。全国の先生方の「英語教育への思い」をつなぎ、情報交換ができる場にしていこうと予定。詳細は、『英語情報Web』にて今後お知らせいたします。

中学校・高等学校

実践報告